

市内遺跡試掘・確認調査報告書Ⅲ

—平成26年度—

平成27(2015)年3月
秋田県男鹿市教育委員会

市内遺跡試掘・確認調査報告書Ⅲ

— 平成 26 年度 —

平成 27 (2015) 年 3 月
秋田県男鹿市教育委員会

序 文

本書は平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月まで国庫補助と県補助を受けて実施した市内遺跡の試掘・確認調査の報告書です。

豊かな自然に恵まれた男鹿市には、長い歴史と素晴らしい文化が受け継がれております。重要無形民俗文化財「男鹿のナマハゲ」は、全国に知られた大晦日の行事ですが、昨年 10 月には、この男鹿のナマハゲをはじめとした全国の 8 件の来訪神行事と、それを実施している 9 自治体による「来訪神行事保存・振興全国協議会」を発足しました。今後、ユネスコ無形文化遺産登録を目指してまいります。また、平成 23 年 9 月に大潟村とともに認定された「男鹿半島・大潟ジオパーク」の取り組みも進んでいます。

市内には埋蔵文化財が約 320 カ所確認されていますが、これらの埋蔵文化財は、ふるさとの歴史を学ぶ貴重な財産であり、未来へ引き継いでいかなければならない文化遺産であります。

近年、道路建設や宅地造成など、豊かで快適な生活を築くための開発事業が行なわれ、埋蔵文化財との調整を図ることが急務となってきておりますが、それらの各種事業のため、遺跡の試掘・確認調査は、その基礎的なものであります。この報告書が文化財の保護活動の啓発と、学術研究の発展にいささかでも寄与できれば幸いです。

本報告書をまとめるにあたり、調査にご協力いただきました関係各機関を始め関係者の方々に深く感謝いたしますとともに、今後とも埋蔵文化財の保護につきましてご理解下さいますよう、お願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

男鹿市教育委員会

教育長 杉 本 俊比古

例　　言

- 1 本報告書は、平成 26 年 4 月から平成 27 年 3 月まで、男鹿市教育委員会が国庫補助金、県補助金を得て実施した遺跡の試掘・確認調査報告書である。
- 2 本報告書に収録した遺跡の試掘・確認調査は、男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班の職員が担当した。
- 3 本報告書に使用した地図は、男鹿市管内図 50000 分の 1、男鹿市都市計画図 2500 分の 1、10000 分の 1 地形図を使用し、「男鹿市統合型 GIS」システムから出力した。また工事施行者から提供された工事用図面を用いた。
- 4 本報告書に使用した土色表記は、農林水産省技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 1997 後期版」によった。
- 5 調査にあたっては、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室よりご指導をいただいた。
- 6 本報告書に掲載した遺物及び記録類は、男鹿市教育委員会生涯学習課において保管している。
- 7 本書で参考とした文献は第 3 章末に一括して掲載した。

凡　　例

- 1 挿図の調査位置図については、主として男鹿市管内図、男鹿市都市計画図を使用し、一部事業関係で作成した図面を使用した。
- 2 握図の縮尺と方位は不統一であり、それぞれ図ごとに縮尺と方位を示した。

調査体制

調査担当者 男鹿市教育委員会

調査体制 男鹿市教育委員会生涯学習課文化財班

　　生涯学習課長 加藤 秋男

　　文化財班

　　主幹 昼山 喜美

　　主席查 伊藤 直子

　　主任 齊藤 康平

　　干事 加藤 麻耶

整理作業 泉 明 石川ひとみ 鈴木由紀子 氷田 敦子 高橋チエ 板橋志保子

目 次

序 文
例 言
凡 例
調査体制

第1章 事業の概要	1
-----------------	---

第2章 男鹿市の位置と環境

第1節 男鹿市の位置と立地	1
第2節 男鹿半島の地形と地質	1

第3章 試掘・確認調査

第1節 平成26年度の調査	7
(1) 市内遺跡詳細分布調査(鶴木地区)	7
(2) 確認調査 商業施設建設事業(五輪野遺跡)	12

参考文献	17
------------	----

報告書抄録	18
-------------	----

挿図目次

第1図 試掘・確認調査位置図	2
第2図 男鹿半島地質図(の場ほか1989)	5
第3図 男鹿半島の地形変遷	6
第4図 詳細分布調査(鶴木地区)位置図	8
第5図 詳細分布調査(鶴木地区)調査区配置図	8
第6図 商業施設建設事業(五輪野遺跡)位置図	14
第7図 商業施設建設事業(五輪野遺跡)調査区配置図	14

写真図版目次

写真1 市内遺跡詳細分布調査(鶴木地区)試掘調査①	9
写真2 市内遺跡詳細分布調査(鶴木地区)試掘調査②	10
写真3 市内遺跡詳細分布調査(鶴木地区)試掘調査③	11
写真4 商業施設建設事業(五輪野遺跡)試掘調査①	15
写真5 商業施設建設事業(五輪野遺跡)試掘調査②	16

挿表目次

第1表 試掘・確認調査一覧	2
第2表 文化財保護法手続き一覧	3

第1章 事業の概要

秋田県男鹿市には、縄文時代から近代までの遺跡が存在し、昭和62年度に国庫補助事業で旧男鹿市内全域の詳細分布調査を実施している。その後も試掘調査、平成17年の旧若美町との市町合併を経て、現在、約320カ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。

平成26年度は、埋蔵文化財保護と開発事業に適切に対処し、周知の埋蔵文化財包蔵地を把握するため、市内遺跡詳細分布調査として鶴木地区の1カ所で試掘調査を実施した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地または遺跡が存在する可能性のある範囲における公共事業や民間による開発行為などについて、事前の事業照会と協議を経て、詳細な把握が必要な箇所の試掘調査を1カ所で実施した。試掘調査を実施した箇所については第1表・第1図に示し、調査内容については第3章に記す。

その他遺跡内における公共事業については、文化財保護法第94条の手続きをとり、工事立会条件で立会調査を実施、もしくは慎重工事として工事を実施した（第2表）。なお、今年度は試掘・確認調査を経て発掘調査を実施したものはない。

本報告書には、平成26年4月1日から平成27年2月27日まで行った調査を掲載している。

第2章 男鹿市の位置と環境

第1節 男鹿市の位置と立地

男鹿半島は秋田県のほぼ中央部にあり、本州から日本海に約25km突出した本県唯一の半島である。この半島は、かつて島であったが、隆起や堆積物川・米代川の両河川が運ぶ土砂や北東季節風がもたらす飛砂などの影響によって八郎潟を包む形で本州と結びついたといわれている。

平成17年3月に旧男鹿市と旧若美町が合併したことにより、半島全域が男鹿市域となった。東西約24km、南北約24kmで、面積が約241km²あり、北東側は三種町、東側は大潟村、南東は潟上市と接している。

第2節 男鹿半島の地形と地質

男鹿半島の地形は西部山地、中央丘陵地、寒風山地及び潟西低地の四つに区分される。そのうち西部山地が骨格となり、これを基盤として新しい岩層が次々と生成した。半島の主峰は西部山地の本山（716m）で、分水嶺は西側分水嶺（入道崎一本山一毛無山一潮瀬崎）、中央分水嶺（毛無山一寒風山）と東側分水嶺（五里合一寒風山一生鼻崎）が河川流域を4区分している。

西部山地は、第三紀のグリーンタフ火山活動による火山噴出物が主体となっている山地で、西海岸の本山西方は急峻な山岳地帯をなしており、谷の刻みは深い。海岸はこまかい屈曲がきわめて多く、歩行も困難な急崖と岩礁が連続する。この複雑な屈曲は無数の岩脈によるものである。

海岸平地は乏しく、戸賀湾と加茂青砂の狭い平地に集落があるにすぎない。西部山地の北部には数段の海岸段丘が発達している。

中央丘陵地は西部山地の東側に広がり、含油第三系の軟弱な水成岩よりなる。海岸段丘によって数段の平坦面ができ、さらに河谷によって細かく開析されて低位丘陵をなしている。

寒風山地は、本来中央丘陵地と同質の地質であるが、含油第三系の褶曲・断層構造帶に噴出した寒風火山によって地形の変化を生じたものである。寒風山（355m）は新期火山で、楯状円錐火山（コニト



第1図 試掘・確認調査位置図

第1表 試掘・確認調査一覧

No	調査原因	事業名	遺跡名	所在地	事業主体	調査期日
1	試掘・確認調査	市内道路確認調査	—	男鹿市鶴木字エソガ台	男鹿市	H26.11.11~12
2	試掘・確認調査	商業施設建設事業	五輪野遺跡	男鹿市北浦北浦字五輪野	株式会社ホーマック ニコット	H26.11.26

第2表 文化財保護法手続き一覧

No	事業名	事業者名	所在地	該当道路	申請日	対応分類	指示対応	調査日	調査員	調査結果
1	配水管布設工事	男鹿市	男鹿市船川港台鳥字野竹地先	野竹道路 H26.6.11	94条	立会調査	H26.8.25	伊藤 青藤	遺構 遺物なし	
2	道路法面補修工事	秋田地域振興局	男鹿市脇本町字七沢地内	脇本城跡 H26.6.16	94条	慎重工事	—	—	—	

ロイデ）に属する。

潟西低地は、寒風山地の東に広がる地域で、潟西層の堆積面である潟西台地と八郎潟の沖積面からなり、その間に五里合盆地がある。北部では段丘上に砂丘が発達するが、南部では脇本一飯ノ町一小深見の砂丘を基として、それ以南に発達した砂州・砂丘が本土側から延びた砂州と連なっている。

男鹿半島は、そのほとんどが新第三紀と呼ばれる地質時代からなっている。さらにその地層は日本における新第三紀の標準的な地層「標式地」の一つとして古くから多くの研究がなされてきた。近年、第四紀の地層研究も飛躍的に進み、日本海側の地史を編む上で貴重な地層が分布することも知られるようになった。沖積層として主要なものは八郎潟堆積物と半島頸部の砂丘砂堆積である。八郎潟堆積物は厚さが最大約50 mで潟西層を覆い、シルト～軟泥よりなる。最初の堆積は内湾性で、時代は縄文時代早期である。これが現世最初の海浸である。それから外洋性高鹹水域になる。これまでの堆積はシルトで、この上部に寒風山からとみられる火山噴出物層が挟まれ、堆積物は泥に変わるとともに内湾性となり、ヘドロになって潟化して現在に及ぶとされる。このような潟化の推移は、南北両面のにおける砂州・砂丘の発達によるものである。砂丘砂は腐蝕土を挟み腐蝕土の基底には火山灰が含まれる。

男鹿半島の海岸線は北岸、西岸、南岸からなる。北岸が五里合から入道崎までの間である。五里合から相川までは比較的単調でゆるい弓形をなす。この部分の海岸はおおむね背後に海食崖の連なる狭い砂浜となっている。相川以南では海食崖が海に迫って砂浜がほとんど無くなり、西黒沢から入道崎まで凹凸に富む岩石海岸となっている。

西岸は入道崎から門前まで続く。戸賀湾と加茂の湾入部を除けば海岸線はほとんど直線的に南北に連なり、きわめて細かい凹凸に富んでいる。また数多くの小さな島が点在する。ここは西部山地の急な斜面が直接海に落ち込んでおり、大部分が磯浜で砂浜は戸賀湾などの入り江の奥にわずかに見られるだけである。

南岸は門前から船越まで続く。門前から船川までは塩瀬崎・館山崎・金ヶ崎・鞠ノ崎の4つの比較的大きな岬が突出する岩石海岸である。脇本以東は背後に砂丘が配列する広い砂浜になる。本山の南側には第2の高峰である毛無山(677 m)が、北側には真山(567 m)が続いている。

寒風山は標高355 mの小規模な成層火山であり、中央丘陵地の上に噴出した熔岩がその山体の大部分を形成している。熔岩は主に安山岩であり、玄武岩もわずかに噴出している。火山としての地形を非常によく残しており、姫ヶ岳の東斜面にある第2火口、同じく北側にある第1火口等の火口、熔岩流の表面に発達する熔岩堤防や熔岩じわなどが観察される。

男鹿半島北西部の戸賀湾周辺に存在する3つの目潟群は、いずれもマールと呼ばれる火山の火口に水がたまつるものである。どの目潟もほぼ円形で、底がほぼ平らであり、それぞれが1回のマグマ・水蒸気爆発、もしくは水蒸気爆発によって形成されたものと考えられている。目潟火山の活動は、最近では三ノ目潟が約2万～2万4千年前、一ノ目潟が約6万～8万年前に形成され、二ノ目潟は一ノ目潟と三ノ目潟の中間に推定されるようになった。この年代は、目潟噴出物からなる地層と段丘面との関係や広域火山灰との層位関係、さらに湖底堆積物の放射性炭素による測定年代などに基づいた推定である。

一ノ目潟は平成19年に国の天然記念物指定を受けている。戸賀湾自体も円形の湾であり、その周囲に戸賀浮石層と呼ぶ火山噴出物を堆積するが、目潟とは違う成因によるものと考えられている。

男鹿半島は面積が狭いので大きな河川は無い。しかし多くの小河川が西部山地から放射状に日本海に流出している。いずれの河川も流域面積が小さいことから水量は少ないが、地形が急峻であることを反映して急流である。

半島内で最も長い川は滝川であり、毛無山の南斜面に発し東北東に流れ下り滝川付近で北に向きを変え、浜間口で日本海に流れ出ている。比詰川は毛無山と寒風山を結ぶ分水嶺の南側を流れて羽立から日本海に流れ出ている。

男鹿半島の段丘は大部分が海成段丘である。これらは更新世以後の海水準変動、地盤の隆起などの原因で形成されたものであり、今のところ7段に区分されている。そのうちもっとも広く分布している段丘は湯西段丘と名付けられている。この段丘は半島東部では堆積段丘であり、段丘面の下には厚さ20~30mに及ぶ湯西層が存在している。

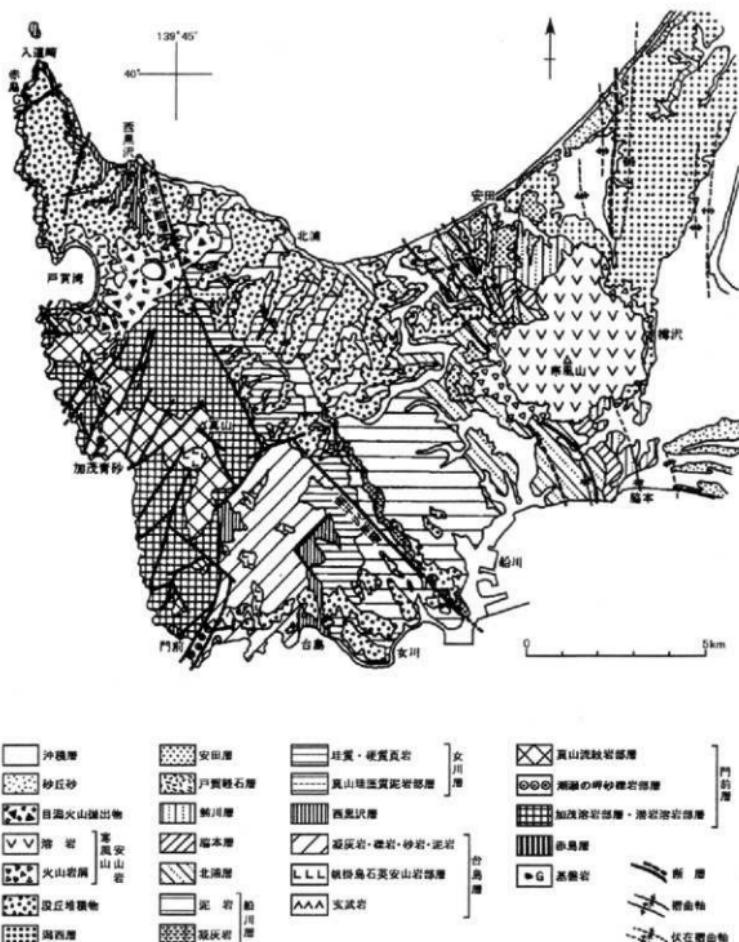
それに対して西部では堆積物は数mと薄く、侵食段丘の様相を呈する。このことから、湯西層堆積当時、現在の半島東部は地層が厚く堆積するような海であったが、西部は陸（島）であり、その周辺が波食台をなしていたと考えることができる。

湯西段丘より新しいのは相川段丘で、半島北岸、南岸に広く分布する。この段丘面は海岸付近から見たときもっともよく目立つ。たとえば南岸の金ヶ崎から東にいたる鶴ノ崎方面を見ると、海岸から切り立った崖があり、その上が広大な台地になっている。また北浦付近は広い水田地帯になっているが、これらの平らな面が相川段丘である。最も新しい橋本段丘は、縄文時代前期の海進時の堆積物によって構成されている。

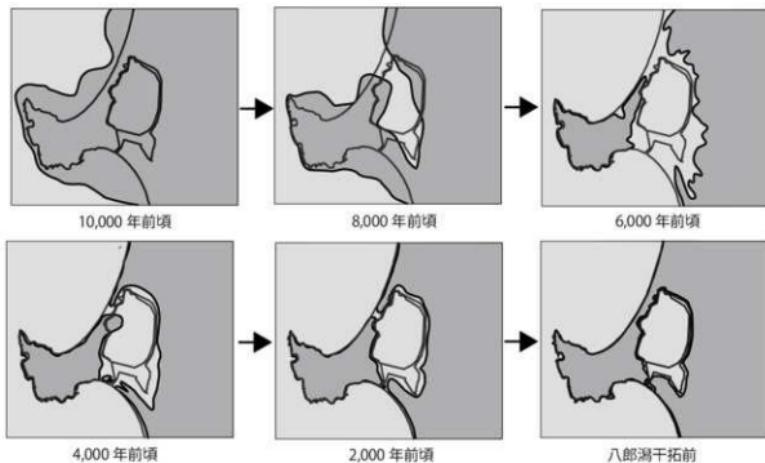
一方、湯西段丘より高い段丘には、下から下真山段丘、上真山段丘、金ヶ崎段丘、金ヶ崎高位段丘がある。これらの段丘も形成当時は西部山地付近では波食台になっており、その部分が現在段丘の平坦面として認識されている。

八郎潟沿岸の低地は八郎潟の沖積平野である。この平野の南部では秋田市まで連続する3列の砂州が発達し、表面は砂丘化している。北部の砂州は能代以北まで連続する。

この他に五里合盆地がある。これは東、南、西側の三方が湯西台地で、北の日本海とは橋本段丘やそれを覆う砂丘によって隔てられている。



第2図 男鹿半島地質図 (的場ほか 1989)



渡部晨氏作図の男鹿市刊行パンフレットをもとに再トレースして作図

第3図 男鹿半島の地形変遷

第3章 試掘・確認調査

第1節 平成26年度の調査

(1) 市内遺跡詳細分布調査（鵜木地区）

調査地 男鹿市鵜木字エソガ台9-1

調査期日 平成26年11月11日～12日

調査面積 260m² (調査対象面積 5.230m²)

調査に至る経緯

当該地は旧八郎潟西岸の台地上に位置する。調査区の南東約500mに位置する中角境Ⅱ遺跡は、平成3年に若美町総合体育館建設に係る発掘調査（調査面積1,010m²）が実施された。調査の結果、古代の堅穴住居跡4軒が検出され、土師器、須恵器が出土している。その他、中角境Ⅲ（古代）、上台Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（縄文・古代）遺跡等、付近には縄文時代～古代の遺跡が多く存在する。これらの遺跡と調査区の間には、東西にのびる深さ10m程の沢があり、現在確認されている周知の埋蔵文化財包蔵地は、この沢の南側に集中している。そのため沢の北側への遺跡の広がりについて確認するため、男鹿市教育委員会では市内詳細分布調査として、周知の埋蔵文化財包蔵地外である当該地の試掘調査を実施した。実施するにあたり、平成26年10月17日付けで土地所有者に協力依頼をし、同年10月22日付けで土地使用の承諾を得た。調査にあたっては所有者の立会いのもと進めた。

立地と現況

当該地は、主要地方道能代・男鹿線から西へ1.1km、標高47mの台地上に位置する。現況は杉林である。土地所有者からの聞き取りでは、戦後、畑として使用していたが、その後、マツを植林していた。マツノザイセンチュウ（松くい虫）の被害により、多くが枯死したため、10年前、一帯にスギを植林した。現所有者の把握する範囲で、盛土、切土等、地形を変更する工事等は行っていない。

調査の概要及び結果

調査区6本を設定して、遺構・遺物の有無を確認した。調査区は南北2m×東西2mを基本とし、調査区3のみ南北3m×東西2mとした。重機により表土除去を行い、人力にて精査した。なお、調査後には埋戻しを行なった。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

調査区1～6

第I層：表土（旧畑耕作土）【～25cm 黒色土（腐葉土）】

第II層：堆積土【10cm～25cm 黒褐色シルト土】

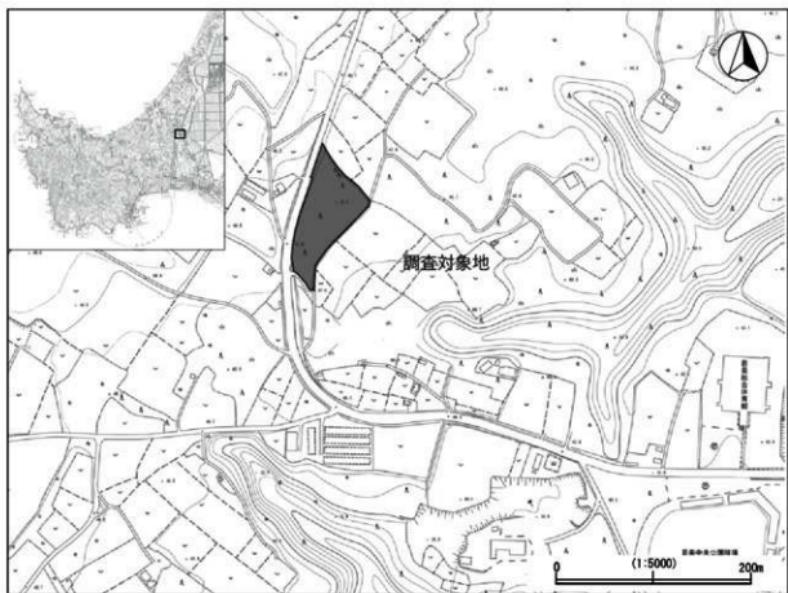
第III層：堆積土【10cm～30cm 暗褐色粘質土】

II・III層ともに炭化物が少量混入する他は、混入物ほほなし。

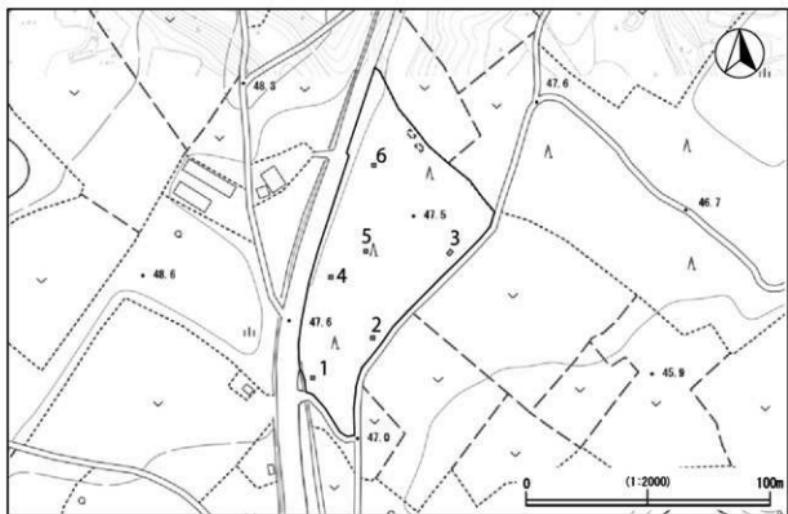
第IV層：地山土【褐色粘質土】

b. 検出遺構と出土遺物

I層は非常にやわらかい黒色土であり、II・III層も擾乱が少なく自然堆積層と判断された。遺構確認はIII層、及び地山土上面で行った。調査区1の北西隅で黒色の不整形プランが確認され、一部掘り下げをして状況を確認した。遺物は発見されなかった。



第4図 詳細分布調査（鵜木地区）位置図

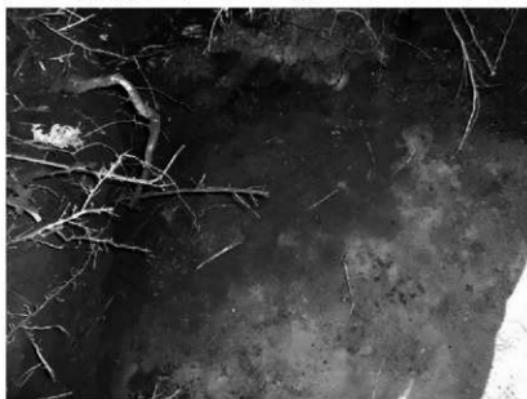




調査区周辺全景
県道沿いに位置し、現況はスギ林
周辺には畠が多い



調査区1 完掘状況



調査区1
不整形のシミは擾乱と確認された

写真1 市内遺跡詳細分布調査（鶴木地区）試掘調査①



調査区 2 完掘状況



調査区 2 堆積状況



調査区 3 堆積状況
一部握り下げして地山の状況を確
認した

写真2 市内遺跡詳細分布調査（鶴木地区）試掘調査②



調査区 4 完掘状況



調査区 5 完掘状況



調査区 6 完掘状況

写真3 市内遺跡詳細分布調査（鶴木地区）試掘調査③

(2) 確認調査

商業施設建設事業（五輪野遺跡）

調査地 男鹿市北浦北浦字五輪野 156-5、158-1、158-2

調査期日 平成 26 年 11 月 26 日

調査面積 24.0m² (調査対象面積 3,275m²)

調査に至る経緯

株式会社ホーマックニコットは、北浦地区で開発行為による商業施設新設を計画していることから、男鹿市教育委員会へ事業予定地区における埋蔵文化財の有無を照会した。市教委は、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「五輪野遺跡」に登録され、事前調査の必要性がある旨を株式会社ホーマックニコットへ回答した。その結果、株式会社ホーマックニコットから平成 26 年 11 月 13 日付けで事前調査の依頼があり、埋蔵文化財の有無を確かめるため、確認調査を実施した。

立地と現況

当該地は五輪野遺跡（縄文時代）の南端に所在する。北浦地区の主要地方道入道崎寒風山線沿いであり、海岸より約 650 m、標高 33m の台地上に位置する。東側には南北に大きな沢が入る。以前、畑地を工場へ転用し、工場廃業後は建物を取り壊しており、現況は荒地となっている。当該地が含まれる五輪野遺跡については、昭和 39(1964) 年刊行の『男鹿市史』に以下の記述がある。「縄文中期の遺物で単独に採集されたもの一つに、北浦五輪野の土偶がある。これは首を失っているが、やはり女神像で表裏にかざりの線条をほりこみ、これとほぼ同じものが、森岳木戸沢から出土している」。出土地点等の詳細は不明である。

調査の概要及び結果

調査は事業予定地に調査区 4 本を設定して、遺構・遺物の有無を確認した。重機により表土除去を行い、人力にて精査した。調査区 1 ~ 4 ともに、2.0m × 3.0m とした。

a. 層序

調査地の基本層序は下記の通りである。

調査区 1

第Ⅰ層：客土 【～30cm、ごく薄い植物層（現表土）下に碎石層】

第Ⅱ層：客土 【30cm、ごく薄い旧表土（工場建設時の表土か）下に褐色粘質土
(コンクリート、ビニール、石が多量に混入する)】

第Ⅲ層：客土 【80cm、青灰色粘質土（コンクリート、ビニール、石が多量に混入する）】

第Ⅳ層：客土 【80cm～青灰色粘質土（コンクリート、ビニール、石が多量に混入する）】

確認は安全のため、第Ⅳ層途中までに留めた。

調査区 2

第Ⅰ層：客土 【～30cm、褐色粘質土】

第Ⅱ層：堆積土 【20cm、黒褐色土】

第Ⅲ層：地山土 【褐色粘質土】

第Ⅱ層を切土し、I 層を盛土している。

調査区 3・4

第Ⅰ層：客土 【10～50cm、ごく薄い植物層（現表土）下に碎石層】

第Ⅱ層：地山土 【20cm 程度まで碎石がまじる。転圧の痕跡か】

地山土を切土し、Ⅰ層を盛土している。

※【】内の数値は、各調査区で得られた堆積の厚さを示す。

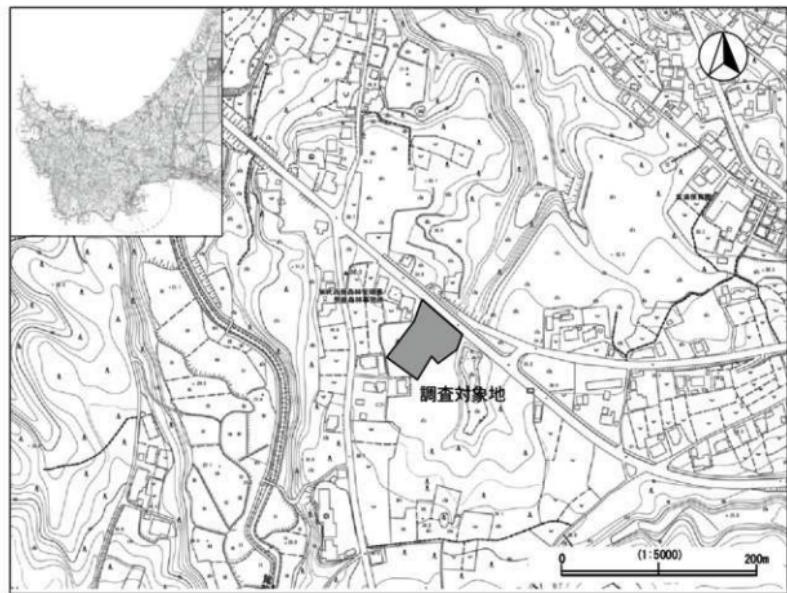
b. 検出遺構と出土遺物

調査区3・4は、地山土を切土して転圧、整地した痕跡が確認された。調査区1は、地山土は確認できなかったが、相当深く掘りこまれ、中にはコンクリートやビニールが多量に入れられていた。Ⅱ層の上面にごく薄い旧表土が確認されたため、以前、工場が建設される際の整地痕跡と判断される。自然堆積層と判断される調査区2のⅡ層上面、および地山土上面にて遺構確認を行ったが、遺構、遺物は発見されなかった。

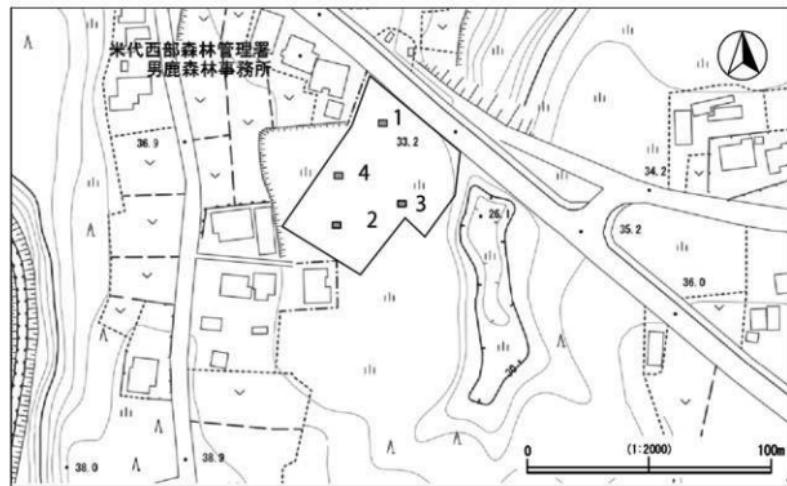
c. 所見

当該地について、遺跡は存在しないと判断した。

しかし、周知の埋蔵文化財包蔵地「五輪野遺跡」内に予定地がかかるため、文化財保護法第93号に伴う届出書の提出を指示した。



第6図 商業施設建設事業（五輪野遺跡）位置図



第7図 商業施設建設事業（五輪野遺跡）調査区配置図



調査区周辺全景
県道沿いに位置し、現況は荒地
住宅地に隣接する



調査区1 完掘状況
コンクリートや石などが多量に入
りこむ
深く掘りこまれ、地山土の確認に
は至らなかった



調査区2 完掘状況

写真1 商業施設建設事業（五輪野遺跡）試掘調査①



調査区 2 土層堆積状況
この調査区のみ自然堆積層が確認された



調査区 3 完掘状況



調査区 4 完掘状況

写真2 商業施設建設事業（五輪野遺跡）試掘調査②

参考文献

- 秋田県 1973 「男鹿半島自然公園学術調査報告」
- 秋田県教育委員会 1981 「秋田県の中世城館」
- 秋田県教育委員会 2001 「泉野冷沢遺跡・中野遺跡」秋田県文化財調査報告書第312集
- 磯村朝次郎編 1978 「船越誌—その自然と歴史—」船越経友会
- 男鹿市 1963 「男鹿市史」
- 男鹿市 1995 「男鹿市史」
- 男鹿市教育委員会 1996 「男鹿市の文化財」第11集
- 男鹿市教育委員会 1998 「男鹿半島 その自然・歴史・民俗」
- 男鹿市教育委員会・男鹿をまるごと探検隊 2002 「男鹿半島地層観察ガイド」
- 男鹿市教育委員会 2005 「市内遺跡詳細分布調査・確認調査報告書」男鹿市文化財調査報告第30集
- 男鹿市教育委員会 2009 「市内遺跡詳細分布調査報告書」男鹿市文化財調査報告第36集
- 男鹿市教育委員会 2011 「市内遺跡試掘・確認調査報告書」男鹿市文化財調査報告第38集
- 栗山知士 2005 「男鹿半島、脇本城跡の立地に関わる地形」「国指定史跡 脇本城跡」男鹿市文化財調査報告第29集
- 白石建雄 2005 「男鹿半島と八郎潟・秋田平野」「日本の地形3 東北」東京大学出版会
- 藤本幸雄・林信太郎・渡部晟・栗山知士・西村隆・渡部均・阿部雅彦・小田嶋博 2008 「地学教育の素材としての男鹿半島」「地質学雑誌」第114巻補遺 pp51 - 74
- 奈良修介 1954 「遺物より見た男鹿半島の古文化」「叢」叢社
- 的場保望ほか 1989 「男鹿地城」「日本の地質2 東北地方」共立出版
- 若美町 1977 「若美町資料」
- 若美町 1981 「若美町史」

報 告 書 抄 錄

ふりがな	しないいせきしづく かくにんちょうさほうこくしょさん							
書 名	市内遺跡試掘・確認調査報告書Ⅲ							
副 書 名	平成 26 年度							
シ リ ー ズ 名	男鹿市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第45集							
編 著 者 名	伊藤直子							
編 集 機 間	男鹿市教育委員会							
所 在 地	〒 010-0595 秋田県男鹿市船川港船川字泉台 66-1							
発 行 年 月 日	2015 年 3 月 31 日							
所取遺跡名	所 在 地	コード 市町村	北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
(詳細分布)	男鹿市鶴木字エソガ台	05206	-	39 58 13	139 54 12	20141111 ~ 20141112	26	市内遺跡詳細分布
五輪野遺跡	男鹿市北浦北浦字五輪野	6-178	39 51 22	139 46 56	20141126	24	商業施設建設事業	
要 約	平成 26 年度に実施した開発事業に伴う事前の試掘調査報告書である。 試掘・確認調査の結果、新たな遺跡は確認されなかった。							

男鹿市文化財調査報告 第45集

市内遺跡試掘・確認調査報告書Ⅲ
—平成26年度—

平成27年3月発行

編集・発行 男鹿市教育委員会
〒010-0595 秋田県男鹿市船川港船川字泉台66-1
電話(0185)24-9103 FAX(0185)24-9156
印 刷 有限会社 クイック
